

LNG 大国、カタールでのエネルギー情勢に関する意見交換

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
専務理事 首席研究員
小山 堅

12 月 10～11 日、カタール・ドーハを訪問し、現地の有識者やエネルギー産業関係者と意見交換を行う機会を得た。特に、12 月 11 日には、Doha Energy Roundtable にパネリストとして参加し、中東のエネルギー情勢や中東から見た世界のエネルギー情勢について、興味深い意見交換を行うことができた。

この Roundtable は、Georgetown University Qatar と米国 Rice University の Baker Institute for Public Policy の共催で、「Geopolitics and the Energy Transition in the Middle East: Investment Pathways amid Uncertainty」を主題とする会議であった。会議では、「Global LNG Outlook」、「Regional Energy Sector Expansions」、「Technology and the Energy Transition」の 3 つのセッションで議論が行われ、カタールなど中東からの参加者を中心に、欧米などからの参加者が 30 名強集まり、活発なパネル討論が行われた。以下、会議での議論を通して特に印象に残った論点や筆者にとっての「学び」を整理したい。

まずは何と云っても、新たな LNG 大拡張期を迎えるカタールが、世界の LNG 市場の展望や課題に対して、並々ならない強い関心を寄せていることを改めて実感したことを挙げたい。小論「国際エネルギー情勢を見る目」の前号（771 号）でも論じた通り、2030 年にかけて世界の LNG 市場は大幅な供給増加に牽引される形で市場規模を大きく拡大させていくことが期待されている。最大の供給拡大は、現在の生産能力、約 1 億トンをほぼ倍増させる可能性がある米国で生じるが、それに続く大拡張はカタールによるものとなる。カタールの LNG 生産能力は、計画中のプロジェクトを積み上げると、現在の 7800 万トンから 1 億 4200 万トンまで、6400 万トンも増加する公算となる。

最大の供給能力追加が見込まれる米国では、様々な民間企業などが、独立して個別に極めて多数の LNG プロジェクトを立ち上げることで、全体として総計 1 億トン近い LNG 供給能力の増加がもたらされる。トランプ大統領が米国の国益の観点から LNG を重視し、LNG 推進を応援・支援していることは事実だが、米国では基本は「民間案件」として LNG 事業が推進されていく。これに対して、カタールは、メジャーなどの IOC や中国などの国有企業がプロジェクトに出資・参加するものの、基本的にはカタールの国営企業であるカタールエナジーが主導して LNG 計画が進められる。まさに国家事業として LNG が推進されていくところがカタールの特徴であり、米国 LNG との大きな違いとなる。

また、カタールの LNG の原料ガスは、世界最大級の膨大な埋蔵量を誇る North Field から供給され、その結果、世界で最も価格競争力の高い LNG であるとも考えられている。さらに、今後の LNG 市場の成長が最も期待されているインドや ASEAN などアジア市場に対して、カタールは相対的に近接した供給源であるとも位置付けられている。こうした特徴・強みを持つカタールの LNG が大拡張期を迎えることは、今後の世界の LNG 市場に多大な影響を及ぼさずに済むはずもない。

2020 年以降、世界がカーボンニュートラル実現に向けて疾駆し始めた時、一時期はガス・LNG も化石燃料の一つとして、その将来の役割に対する不透明感・不安感が高まった時期もあった。しかし、この間も、筆者から見るとカタールは LNG の将来に自信を持ち、とり

わけその中で自国の LNG の強みに信念を持ち続けていたように見える。最近になって、世界的に長期にわたるエネルギー転換の中で LNG が果たす役割への期待が再び高まることになった。LNG の将来に対して確固たるポジションを堅持してきたカタールは、こうした世界の動きでますます自信を強めることになっているのではないかと、とも考えられる。

しかし、同時にこの状況下で、米国 LNG の大幅な拡大にも直面し、カタールとしては、冷静に世界の LNG 市場の先行きについて分析し、課題を探り、対策を検討して行こうとしているのではないかと。例えば、アジア市場における LNG の拡大については、大きな期待が寄せられるに至っているが、その拡大がどこまで具体化・現実化するのか、については様々な不確実性がある。全体の方向性として、米国・カタールなどによる供給増加で、LNG の市場価格に下押し圧力が発生すると、新たな需要が刺激・喚起されることになる、という点で多くの市場関係者の認識は一致しているように思われる。しかし、実際にどこまで価格が低下すると、需要喚起・刺激が顕在化し、需要増加に向けた「効力」をどの程度発揮するのか、不透明な点も多い。今回のカタールでの意見交換でも、こうした点への関心の高さを感じる機会があったことは実に興味深かった。

また、世界最大の LNG 輸入国である中国の今後の LNG 輸入動向に関しても、Roundtable の議論では様々な観点で不確実性があることが指摘された。そもそも、中国のエネルギーミックスにおけるガスの位置づけをどう見るべきなのか、また、ガス供給の中でも LNG の位置づけがどうなるのか、などが将来の LNG 需要を大きく作用することになる。中国にとって最大のエネルギー源であり、豊富な国産資源を持つ石炭利用がどうなるのか、まさに世界を牽引する大幅な利用拡大が進む再生可能エネルギーの将来がどうなるのか、などによってガスの位置づけは大きく影響を受ける。さらに、ガス供給に関しては、エネルギー安全保障の観点から、まずは国産ガスが最優先され、中央アジアなどからのパイプラインガス供給が重視される。ロシアからのパイプラインガス供給の将来的拡大（「シベリアの力 2」パイプラインの将来など）は、まさに中口のエネルギー地政学によって左右されることになるが、これらの動向で中国の LNG 輸入需要は大きく影響を受ける。また、カタールにとっては、供給拡大のライバルとなる米国からの LNG に対して、中国が戦略的にどのような動きを示すか、もカタール産の LNG への需要に対して多大な影響を及ぼす要因となる。これらの点は、今後のカタールにとって重大な関心事であり続けることになるだろう。

また、中国に続く巨大 LNG 市場である日本についても大きな関心が寄せられていることを感じた。第 7 次エネルギー基本計画で打ち出された政策とエネルギーミックスに関して、それをどのように解釈すべきなのか、日本の将来の LNG はどうなるのか、という点は Roundtable の議論でも一つの関心の的であった。このエネルギー基本計画で、「あるべき姿」として示されるエネルギーミックスでは、日本の LNG 需要は低下していくことになるが、「プラン B」として示されたエネルギーミックスでは将来に向けて LNG 需要が増加する、という対照的な将来像の提示をどう理解すべきなのか、などへの関心は高い。ちなみに筆者は、日本にとっての LNG の重要性を指摘し、その安定供給確保のためには、米国 LNG が重要なのは当然であるが、カタール LNG の役割への期待も大きい点を指摘した。

なお、LNG の需要に影響を及ぼす要因として、再生可能エネルギー、原子力などの動向に加えて、今回の議論では、水素、アンモニアなどの革新的クリーン燃料の可能性についても興味深い問題関心が示された。中東でも、こうした革新的クリーン燃料の供給・製造に向けて様々な取り組みが進められてきたが、その高コスト性から Off Taker 確保が困難であり、革新的クリーン燃料市場の発展は足踏み状態にある。この状況下で、LNG の役割に対する期待が底上げされる状況になっている点も関心と呼んでいた。他方、市場が足踏み状態にある中、値差補填制度導入などで具体的な市場創設を図ろうとしている日本の取り組みに対する関心が非常に高いことも今回の議論で改めて感じたことは有意義であった。

以上